

# 北アメリカの北太平洋沿岸地域と極北・亜極北地域の先住民文化 に関する文化人類学研究の動向 — 日本人人類学者および日本の博物館・大学による貢献 —

岸上 伸啓

(国立民族学博物館・総合研究大学院大学)

## 1 はじめに

2015 年 10 月に開催される北方民族文化シンポジウム(通称、網走シンポ)は 30 回目を迎える。我が国における北方研究の発展において北海道立北方博物館の役割はきわめて大きい。筆者は、別稿において 1990 年代から 2005 年頃までの日本における北アメリカ先住民研究の動向について紹介した(岸上 2005; Kishigami 2004)。また、蒲生(Gamo 1980)や岡田(1996)、伊藤(2007)、阿部と伊藤(Abe and Ito 2007)による研究動向紹介がある。従って、本稿では、2005 年以降の日本における北アメリカ北方先住民研究の展開に限定し、アラスカ地域、北西海岸地域、極北・亜極北地域に分けて紹介したい。

最近の北アメリカ北方先住民に関する文化人類学的研究には、国際的に見るといくつかの顕著な傾向が認められる。

第 1 に、環北太平洋地域の諸先住民社会やそれらの文化に再び関心が集まりつつある。米国サンタフェの高等調査研究所(School for Advanced Research)が主催した「サケ」をめぐるセミナーの成果本『キーストーン・ネーションズ—北太平洋の先住民とサケ』が 2012 年に出版された(Colombi and Brooks eds. 2012)。北太平洋では、サケは先住民の生存と文化的アイデンティティの基盤であり、先住民とは歴史的に見ても切っても切れない関係である。同書では、いかにサケがこれらの先住民の文化や歴史、経済において重要な役割を果たしてきたかを論じている。それは、基礎的な文化人類学研究でありながらもグローバル化が進む現代社会における協定や管理のあり方について、サケ漁業政策に提言可能な要素を含んでいるという意味で、単なる民族誌的な比較研究ではない。その比較研究によって北太平洋沿岸地域では、先住民のサケ漁が石油・天然ガス開発やダム建設によって危機的な問題に直面していることやサケ養殖が天然サケ漁業に悪影響を及ぼしていること、サケ資源の持続可能な利用は先住民の主権や文化的アイデンティティの存続に係わる問題であることが明らかにされている。

その後、2014年1月に大阪の国立民族学博物館で開催された国際シンポジウム「北太平洋沿岸諸先住民文化の比較研究—先住権と海洋資源の利用を中心に—」(Comparative Studies of Indigenous Cultures around the North Pacific Rim: Focusing on Indigenous Rights and Marine Resource Utilization)、同年5月にはカナダのノーザン・ブリティッシュ・コロンビア大学で開催された第8回極北社会科学国際会議(ICASS)、そして2015年9月にウィーンで開催された第11回狩猟採集社会国際会議(CHAGS)において、環北太平洋沿岸の諸先住民社会とそれらの文化に焦点を合わせた分科会が開催された。これらの結果、文化人類学者や考古学者、歴史学者らによる研究ネットワークが形成されつつある。

第2に、北アメリカ北方地域の研究でも、先住民の研究者が出現し、ネイティブ・アンソロポロジストとして活躍するようになった(Koperqualuk 2015)。また、現地の先住民と非先住民が協働して研究プロジェクトを実施する機会が増加した(Fienup-Riordan and Rearden 2005; Fienup-Riordan, Meade and Rearden 2005; Fienup-Riordan, Fredda and Rearden 2007; Jolles and Oozeva 2002)。この傾向は、今後も続き、研究形態の主流となると予想される。

第3に、北アメリカ北方地域では、気候変動の先住民社会への影響や先住民の知識に焦点を合わせた研究が増加してきた。1990年代から現在にかけては、地球温暖化といった環境問題が社会科学・人文学分野においても最重要の研究課題となったため、この地域を研究している文化人類学者も従来の民族文化や社会の研究ではなく、地球温暖化が先住民社会にどのような影響を及ぼしたのか、歴史的に先住民社会の人々が環境についてどのような知識を持ち、どのように環境変動に対処してきたのか、また、環境についてどのような知識を生み出してきたかといった問題を研究の中心に据えるようになってきた(たとえば、本多 2010; Grossman and Parker eds. 2012; Krupnik and Jolly eds. 2002)。

第4に、都市在住の北方先住民に関する研究が始まった(たとえば、Kishigami and Lee 2008; Kishigami 2015; Terpatra 2015)。グローバル化の影響下で、多数の北方先住民が故地を離れ、都市に移住し、生活を営むようになってきた。このため、都市における北方先住民の社会や文化、社会問題に関する研究が行われるようになった。

第5に、アラスカやカナダ極北地域では、混淆経済下における生業活動に関する研究が、最近、注目されるようになった。その焦点は生業活動と現金との関係である(たとえば、Gombay 2009; Wenzel 2013)。

これらの研究においては、欧米人の研究者が主導的な役割を果たしてきたが、この20年あまりの間に日本人の言語学者や文化人類学者も北アメリカ北方地域のさまざまな先住民社会で現地調査を行い、その成果を蓄積してきた。それらは質の高い研究成果であるにもかかわらず、欧米人の研究者によって引用されることがきわめて少ない。

本稿では、21世紀に入り日本人の研究者が北アメリカ北方地域でどのような調査や研

究を実施してきたかに力点を置きながら、研究を紹介し、検討を加える。なお、同地域における考古学や言語学の膨大な研究成果を網羅して紹介することは筆者の能力を超えているため、本稿では日本人による文化人類学的研究におもな対象を絞ることを断っておきたい。

## 2 日本人による北アメリカ北方地域における研究の展開

### 2-1 アラスカ地域

アラスカでは、1960年代以降、岡正雄や蒲生正男、祖父江孝男、岡田宏明、岡田淳子、宮岡伯人、谷本一之、小谷凱宣らの日本人研究者がアラスカ・エスキモーについて文化人類学や考古学、言語学、民族音楽学の研究を実施し、多大な業績をあげてきた。また、1970年代以降、アリューシャン列島のアリュートについては大島稔が民族学調査や言語調査を実施してきた。カナダ極北・亜極北地域では1970年代から原(須江)ひろ子やスチュアートヘンリ、煎本孝らが調査を行った(岸上 2005 を参照されたい)。

21世紀に入ると、イクタヒロコ、榊原千絵、岸上伸啓ら日本人の文化人類学者や地理学者がアラスカ北西地域のバローやポイント・ホープで現地調査を開始した。イヌピアットのダンスの研究を専門とするイクタ(Ikuta 2004)は、約70年の中断を経て1988年に復活され、その後2年に1度の頻度でバローにおいて実施されている「使者祭」について、それが伝統を再生させる場となっていることを指摘している(Ikuta 2007)。また、セント・ローレンス島のユピギート(Yupiget)とイヌピアットの伝統的ダンスを比較し、両者のダンスはそれぞれ身体化された知識のシステムであり、動きを通して人びとが環境について知っていることや彼らと環境との関係のあり様を表現していると指摘する。そして彼らのダンスは、アラスカにおける先住権を主張するさまざまな政治的な場面において、人びとが援用する政治的象徴装置もしくは表出手段となっていると主張している(Ikuta 2011)。

地理学者の榊原千絵は、2004年からポイント・ホープとバローにおいてイヌピアット社会への温暖化の影響について調査し、気候変動の影響が出ている現在でも、クジラおよび捕鯨とそれに関連するさまざまな活動が「クジラの民」イヌピットの生活とアイデンティティの根幹をなしていると指摘している。1977年にポイント・ホープ村は、海水面の上昇、海岸部の浸食、頻発する水害や嵐のために、村を標高のたかい場所に移動せざるを得なかった。榊原はポイント・ホープ村の移動についての語り(storytelling)を吟味し、村民は物語を通して消えゆく場所との関係を維持させており、環境変化に対処する手段になっていると指摘している(Sakakibara 2008)。また、彼女は、イヌピアットはドラム音楽を作ることを通して情緒や文化的なレベルで温暖化に起因する変化に対処し、クジラとの関係を維持させようとしてきたことを例証している(Sakakibara 2009)。さらに気

候変動によって将来の不確実性が高くなった現在、イヌピアットの人びとはクジラとの関係をさらに強めることによって困難を乗り越え、文化的アイデンティティを維持・強化していると述べている(Sakakibara 2010)。

岸上伸啓は、2006年から2013年にかけてアラスカ州バローでクジラの肉や脂皮の分配について解明するために捕鯨活動、捕鯨集団の社会組織、捕鯨に関連する祭りや祝宴、気候変動の捕鯨に及ぼす諸影響などについて現地調査を実施した。この結果、以下のようない点を明らかにした。(1)捕鯨および捕鯨に関連する諸活動は現在のバローの人びとの生活やアイデンティティにとって基盤をなすものであり、文化・社会的に重要である。(2)鯨肉や脂皮の分配のやり方には同じ村の捕鯨キャプテンによっても差異があるとともに、通時的にも簡略化が見られる。しかしながら捕鯨とその後の分配によってのみ、鯨肉と脂皮は村人の口に入るという点において重要な社会制度であり続けている。(3)「先住民生存捕鯨」(Aboriginal Subsistence Whaling)としてのこの捕鯨には、商業性が認められておらず、産物を売買し、現金収入を得ることができない。その一方で、捕鯨を実施するためには、多額の資金を必要とする。現在、彼らが資金を調達できるのは、地域内の賃金職からの収入と石油開発からの配当金があるからだと考えられる。(4)地球の温暖化による捕鯨の困難化や動物福祉団体や環境保護団体による反捕鯨活動の増大化が捕鯨の存続に負の影響を及ぼしている。岸上は、これらの成果を基に現代イヌピアットの捕鯨文化に関する論文や民族誌を出版している(岸上 2012a, 2012b, 2014c; Kishigami 2010, 2013a, 2013b)。

アラスカ西部沿岸から西南部沿岸にかけて分布するユピート(ユピック)文化については、久保田亮がアラスカ西南部のチュピック村落で伝統的なダンスや生業、学校教育、金鉱開発の影響などに注目しつつ、社会変化および、「伝統文化」やアイデンティティの継承に関する民族誌的調査を実施した(久保田 2005, 2006a, 2006b, 2008, 2009a, 2012)。また、最近では、アラスカにおける法的概念としての「生業(subsistence)」を検討した研究(2009b)、研究者が採録した歌をいかに現地社会に還元し、活用するかという実践的研究(久保田 2011)や気候変動が漁撈活動に及ぼす影響に関する研究(久保田 2013)を発表している。久保田は、現代チュピック社会における伝統的なダンスや生業、生き方をキリスト教の宣教活動や連邦政府、資源開発、気候変動などとの関連で分析し、調査村では伝統的なダンスや生業活動が継承され、アイデンティティの維持に貢献していることを報告している。しかし、この自律的生活も彼の調査によれば、問題が無いわけではない。たとえば、チュピックの学校教育を例にとると教育方針や内容には自律化が進み、文化遺産プログラムを通して伝統文化の継承が行われてきた。しかし、その自律とは連邦政府の政策によって大きく翻弄されてしまう可能性があり、制限付きの自律であると指摘している(久保田 2009a)。

高野孝子はアラスカの中央ユピックの集落、ロシアン・ミッション村で先住民の教育プログラムに関する調査を行った。同村では 2001 年から学校教育に狩猟や漁撈を取り入れ、生徒と大地(自然)とのきずなを生みださせる教育プログラムの導入の結果、学校と地域社会との間にあったギャップがふさがり、子どもたちの自尊心やアイデンティティの育成を促進したと報告している(高野 2010)。高野の研究は、人類学の視点や調査方法を援用した教育学的研究といえる。最近では、京都大学の大学院生である一戸恒人(いちのへつねと)がアラスカ州セント・ローレンス島でシベリア・ユピックの狩猟活動やそれが行われる「場」について風土論的な視点から現地調査を行っている。

手塚薫は、2003 年から 2005 年までの期間にコディアック島のコディアックとオールドハーパーでアルティークのサケ漁および漁獲物の利用と流通について調査を実施し、その現状や資源管理のあり方を検討している。アルティークの人びとにとってサケは商業漁業の対象であるのみならず、自家消費用食料や他所に住む家族や親族への贈り物として重要であることを指摘している(手塚 2008)。また、高野孝子(2009)は、コディアック島において、失われつつある子どもと自然のきずなを回復させることを目的とする先住民の教育プログラムを紹介し、アイデンティティ構築の視点から検討を加えている。

井上敏昭は、アラスカ内陸部にあるグイッチンの村落で調査を実施し、同社会におけるポトラッチ儀礼やビーズワーク、狩猟・漁撈活動、獲物の分配がアイデンティティ構築に深く関わっていることを解明してきた(井上 2007)。また、井上はグイッチンによる石油開発反対運動や石油開発・環境汚染への村人による対応について分析を行っている(井上 2009, 2012, 2015)。さらにサケ資源の社会資源や食料としての重要性およびその管理について論じている(井上 2008, 2011)。アラスカ大学フェアバンクス校の大学院生である近藤祉秋は、アラスカのクスコクイム川上流にあるニコライ村において、北方アサバスカン社会における動物を殺すことと生かすことを、野鳥の保護を事例として調査している(近藤 2014)。

1970 年代以降、アラスカ内陸部では政治的な理由から人類学者が調査することが難しく、アラスカ州漁業狩猟局生業部(The State of Alaska, Department of Fish & Game)の研究者らによる調査報告を例外として、ほとんど民族誌的な成果があがっていない。このため、井上ら日本人研究者の研究は貴重であり、アラスカ先住民社会の人類学的理解に大きく貢献すると考える。

## 2-2 北アメリカ北西海岸地域

北アメリカのアラスカ南部からオレゴン州にかけての海岸地域に住む先住民は、北西海岸先住民と総称されてきた。

益子待也は 1970 年代半ばよりアラスカ南西部に住むトリンギットの研究を開始した。

彼は死と再生をめぐる神話を吟味し、ポトラッチとは「第2の葬儀」であると指摘するとともに、火の中に食物や毛布を投げ入れる慣行は、トリンギットの論理に従えば、富の破壊ではなく、死者に対する贈り物であると主張した。益子は、ワタリガラスの神話の分析も行っている(Mashiko 2006)。

多くのアラスカ先住民コミュニティは、失業やアルコール問題など深刻な社会経済問題に直面している。しかし、例外も存在し、宣教師ダンカンによって作り出されたアラスカ南西部にあるツィムシアンの村落であるメトラカトラ(Metlakatla)・コミュニティは安定した社会経済発展を遂げてきたことが知られている。岡田淳子は、調査団を編成し、1998年から2000年にかけて同コミュニティの社会経済発展を解明するための現地調査を実施し、報告書を出版している(岡田編 2000)。齋藤玲子(2008)は観光と芸能・工芸制作活動について、岡庭義行はアラスカ先住民土地請求問題処理法(ANCSA)との関連からメトラカトラの社会経済開発を論じている(岡庭 2008)。

渥美一弥は、北西海岸先住民の神話や地名、命名、自治権獲得運動、伝統文化の復興運動、学校教育、伝統文化の語り方などに関心をもち、1980年代から現地調査を行ってきた。彼は神話や地名、先祖が製作したモノなどの民族誌「情報」を「資源」として捉えるという新たな視点からサーニッチによる文化復興活動や学校教育に検討を加えている(渥美 2005, 2008)。

立川陽仁は、1990年代末からカナダ・バンクーバー島のキャンベル・リバーでクワクワカワクウの先住民漁民に関する民族誌的調査を実施してきた。最近では、先住民にとってのオヒョウの重要性に関する研究(立川 2006)などを出版している。また、先住民による現代のサケ商業漁業を支えたリクルーター制度や労働組合の内容と機能、現代の先住民のサケ商業漁師による非商業的な生業活動、先住民のサケ養殖業と養殖業協会に関する研究を行い、現代の先住民にとってのサケの経済的かつ文化的な重要性の解明を試みている(立川 2007, 2008a, 2008b, 2009, 2010)。さらに、立川は、現代のクワクワカワクウにおけるチーフ(首長)や歓待についての研究を行い、その成果を出版している(立川 2013, 2014)。立川の研究は北西海岸先住民の現状を民族誌的に取り扱った数少ない研究であり、今後の展開が期待される。また、岩崎まさみはクワクワカワクウのサケの保存、調理、分配に関する研究を発表している(岩崎 2008)。

岸上(2014a)は、バンクーバー島西海岸に住むヌーチャヌヒ(旧称ヌートカ)の捕鯨の復活の可能性について、先住権との関係から検討し、向こう20年の間の復活は難しいことを指摘した。大村(2006a)は、北西海岸先住民の木製品や工芸作品、版画に描かれている図像の機能や表現、内容、造形素(基本部位)について論じている。また、齋藤らは、国立民族学博物館が所蔵している北西海岸先住民版画について研究し、その成果を出版している(齋藤編 印刷中; 齋藤・大村・岸上編 2010)。

小林加奈子は、現代のポトラッチの今日的な意味を仲裁と再生のための儀礼であると  
する研究を発表している(小林 2007)。また、京都大学の院生である永井文也がカナダ・  
ブリティッシュ・コロンビア州のチルコーティン・ネーションの土地権の獲得に関する  
調査を開始している。

### 2-3 カナダ亜極北地域

カナダ亜極北地域の先住民文化について調査を実施した日本人の文化人類学者には、  
原(須江)ひろ子(ヘアー)、新保満(デネ)、煎本孝(チペワイアン)、大曲佳代(クリー)ら  
がいる(詳しくは、岸上 2005 を参照)。

北海道大学において煎本の指導を受けた山口未花子は、ユーコン準州の狩猟民カスカ  
の村で狩猟を通じたカスカと動物の関係について現地調査を実施し、カスカの活動と認  
識の総体としての生活を描き出だした民族誌を出版している。その中で狩猟を成功させ  
るためには、動物の肉体を手に入れるという動きと人間側からの動物に対する儀礼的な  
働きかけの相互作用的な関係を維持させることが必要だと指摘する。そして人と人、人  
と動物は他者でありながら、同等の存在であり、同じコミュニティの一員であるという  
カスカの世界観に基づき、狩猟とは人間と動物との互酬性に基づく「交換」と主張  
している(山口 2012a, 2012b, 2014)。彼女の研究は、ポール・ナダスディ(Paul Nadasdy)  
らが推進している存在論的人類学である。

### 2-4 カナダ極北地域

1970年代後半から21世紀初めまで日本におけるカナダ極北地域の文化人類学・民族学  
研究を牽引してきたのは、スチュアートヘンリ(本多俊和)である。スチュアートは、1980  
年代後半より北西準州ペリーベイ(現ヌナヴト準州クガールク)において民族学的調査を  
実施し、カナダ・イヌイットの生業に着目し、生業活動を実施するためには現金の投入  
が必要で、金銭的に見ると赤字である点や生業活動がレジャー化しつつある点を指摘し  
た(本多 2006; Stewart 2005; 岸上 2005 を参照)。また、生業をどのように捉えるべきかと  
いう定義(枠組み)を提案した(本多 2005)。スチュアート(本多)は、2000年代に入り、  
グリーンランド研究を開始し、気候の温暖化問題や生業活動について北米の極北地域と  
の比較研究を行っている(本多 2010, 2014)。

1980年代半ばから2004年にかけて岸上伸啓はケベック州極北地域(ヌナヴィク)のア  
クリヴィク村を中心に、狩猟・漁撈や家族・親族、名前と命名、ハンター・サポート・プ  
ログラム、食物分配、社会変化などについて調査を行ってきた。その成果として、イヌ  
イットの食物分配の形態は、「分与」と「再分配」が中心的で、「交換」が少ないことを  
指摘した(岸上 2007)。また、イヌイットの生業概念についてシロイルカ猟を事例として、

再検討している(岸上 2008)。近年は、カナダ・イヌイットのホッキョククジラ猟の調査を開始した(岸上 2014b)。さらに、モントリオールに移住したイヌイットの調査プロジェクトを 1996 年から 2012 年まで断続的に実施し、生活状況や問題点について報告している(岸上 2006, 2009; Kishigami 2008, 2013c, 2015)。

大村敬一は、1980 年代末ごろより北西準州ペリーベイ(現ヌナヴト準州クガールク)においてスチュアートとともに調査を実施し、言語や地名、ナビゲーション、在来知、身体資源、生業システム、分配などについて出版している(大村 2005, 2006, 2007, 2009, 2011, 2013a, 2013b; Omura 2005, 2007, 2013)。大村は、在来知を個人の実践によって絶えず変化していく動的な過程として捉え、日常実践に基づいて在来知を捉えなおすとともに、「大地」がイヌイットにとってどのような意味を持っているかについて検討した。そしてイヌイットにとって大地とは、歴史と未来が刻み込まれてゆく記憶の貯蔵庫であり、彼らの記憶を共有し、歴史的な紐帯を生み出す場であると主張している(大村 2013a)。

残念ながら、現時点ではカナダ極北地域において 40 才未満の日本人の文化人類学者は調査を行ってない。

### 3 日本の博物館・大学の北方研究プロジェクト

#### 3-1 北海道立北方民族博物館の展示および国際シンポジウム

1986 年から毎年、北海道立北方民族博物館が組織する北方民族文化に関する国際シンポジウムが開催されるようになった。同館のシンポジウムでは、国内外の研究者による北アメリカ北方地域に関する研究も多数報告され、プロシーディングスに所収されている。また、1 年に 1 冊刊行される『北海道立北方民族博物館研究紀要』や開館 20 周年を記念して出版された『環北太平洋の環境と変化』(2006)にも北アメリカ北方地域の諸民族文化に関する論文が複数所収されている。さらに日本人研究者による北方文化研究の出版物のデータベース「のりす」とを構築し、毎年更新してネット公開している。

これらの事業の展開によって、この 30 年の間に北海道立北方民族博物館は日本における北方研究の拠点として大きな成果をあげてきたと高く評価することができる。

#### 3-2 国立民族学博物館の展示および国際シンポジウム、共同研究

1974 年に創設された国立民族学博物館では、北アメリカ北方地域の先住民文化に関するさまざまな国際シンポジウムや展示会、共同研究を実施してきた。

北アメリカ北方先住民に関する共同研究として、齊藤玲子が研究代表者を務めた「カナダにおける先住民芸術の歴史的展開と知的所有権問題—国立民族学博物館所蔵の北西海岸インディアンとイヌイットの版画の整理と分析を通して」(2007 年度～2010 年度)がある。この研究会では、国立民族学博物館に所蔵されている約 700 点の北西海岸先住



民の版画（シルク・スクリーン）と約 300 点のイヌイットの版画を整理・分析し、版画という新たな技法の導入とその展開が、両者の社会に与えた影響を検討した。その成果の一部は、2009 年の秋に開催された国立民族学博物館特別展「自然の声、命のかたち カナダ先住民の生み出す美」（実行委員長：岸上伸啓）に活かされるとともに、画集や論文集として出版された（齊藤編 印刷中；齊藤・大村・岸上編 2010）。

2009 年の秋に実施された上記の特別展では、カナダ文明博物館（現カナダ歴史博物館）からカナダ先住民コレクション（*First Peoples of Canada: Masterworks from the Canadian Museum of Civilization*）を借用し、民博所蔵のイヌイットおよび北西海岸先住民の版画とともに展示し、カナダ先住民の文化を紹介した（国立民族学博物館編 2009）。この開催にあわせて同博物館において 2009 年 9 月 12 日・13 日にカナダ学会第 34 回研究大会を開催し、カナダ先住民のアートに関するシンポジウム「カナダにおける先住民アートの展開：イヌイットと北西海岸先住民族のアート伝統」（実行委員長：岸上伸啓）を実施した。

2014 年 1 月 11 日から 13 日までの 3 日間、国内外から約 30 名の研究者を招へいして国際シンポジウム「北太平洋沿岸諸文化の比較研究—先住権と海洋資源の利用を中心に」（実行委員長：岸上伸啓・David Koester）を開催した。この初日には、日本人研究者による環北太平洋地域の先住民文化に関する報告が行われ、欧米人の研究者との学術交流が実現した（岸上編 印刷中）。このシンポジウムをきっかけとして、国際的な研究者ネットワークもしくは学会の創出の機運がたかまっている。

このように国立民族学博物館も共同研究、特別展示、国際シンポジウムの実施を通して、日本における北アメリカ北方地域の研究の発展に貢献してきたといえよう。

#### 4 まとめ

本稿において北アメリカ北方地域の先住民研究に関する、21 世紀の日本における研究動向を整理することによって、いくつかの傾向や課題が浮かび上がってきた。ここでは、それらについて整理したい。

第 1 に、北アメリカ北方地域を研究対象とする日本人研究者の研究動向とその問題点について指摘したい。1990 年代まで北アメリカ北方地域の先住民文化に関する研究は、ボアズのジェサップ北太平洋調査プロジェクト（1897-1902）以降、おもに米国人やカナダ人が中心となって牽引してきたが、日本人など多様な背景を持つ文化人類学者が調査を行うようになった。また、宮岡伯人が環北太平洋言語プロジェクトの展開を通じて、1990 年代以降日本人の若手研究者を多数育成した（宮岡編 1992；Miyaoka, Sakiyama and Krauss eds. 2007）。当時、現地調査を行ったのは博士後期課程の大学院生であり、現在、30 歳代後半から 40 歳代後半となり、大学教員として活躍している人が多い。同地域における文化人類学者による調査も 1990 年代以降増加している。このように見ると、かな

りの数の日本人研究者が、北アメリカ北方地域の先住民族の言語や文化を研究していることが分かる。しかしながらいくつかの問題点が存在する。

問題点の第1は、日本人の文化人類学者は研究成果を日本語で出版することが多いため、国外ではその成果がほとんど知られていないことである。このような状況を改善するためには、研究成果を英語などで口頭発表することや出版することが必要であると考ええる。

問題点の第2は、日本においては北アメリカ北方地域の先住民族を研究している言語学者と文化人類学者の間ではほとんど学术交流がないことである。宮岡伯人や大島稔らは言語のみならず、その話者の文化にも関心を持っていたが、彼らの学生たちは言語のみを専門に研究する傾向が強く見られ、文化人類学者との対話にほとんど関心を持っていないし、交流する機会も限られている。両者が連携すれば、より視野が広く、かつ深い民族文化研究を展開できると考えられるので、学术交流や現地調査の連携が必要であると考ええる。そのためには、国立民族学博物館や北海道立北方民族博物館がイニシアティブをとり、両分野の若手研究者の間で情報や意見を交換する機会を設けることが必要である。

さらに、言語学分野では、宮岡伯人による大型調査プロジェクトによって若手研究者が多数育ったが、文化人類学分野では後継者不足が顕在化している。これは文化人類学者の多くが個人の研究プロジェクトとして現地調査を実施してきたことと、教育の場である大学や大学院にこの地域を専門とする文化人類学者の数が少なかったことに起因していると考えられる。アラスカおよび北アメリカ北西海岸地域、カナダ亜極北地域では、数が少ないものの40才未満の若手研究者が調査を実施しているが、カナダ極北地域では皆無である。文化人類学分野では、当該地域を専門とする若手研究者の養成は急務である。とくに国内の大学の学部レベルでの北方文化教育を強化する必要があると考える。これら3つの問題点は、われわれが克服すべき大きな課題である。

第2の研究動向として、大型の研究プロジェクトが実施されていない現状が認められる。かつては宮岡や岡田夫妻、谷本・大島、スチュアートらの科研調査プロジェクトが北アメリカ北方地域で実施されてきたが、現時点では、同地域において日本人研究者が主導する大型調査プロジェクトは実施されていない。将来的な研究の展開を考えると総合的かつ学際的な大型国際調査プロジェクトの組織化と実施が望まれる。その一方で、この10年あまりの期間に限定すれば、北海道立北方民族博物館と国立民族学博物館は、両館の国際シンポジウム、展示プロジェクトおよび成果出版を通じて北方文化研究の推進・展開に貢献してきたといえよう。

文化人類学分野における北アメリカ北方先住民文化研究の発展に日本人の研究者は貢献をしてきたが、いくつかの問題があることも分かった。ここで指摘した問題点に留

意しつつ、今後、日本人研究者は、北アメリカ北方地域の先住民文化に関して、海外の研究者や現地の人びとと協働しながら、研究を推進していくことが望まれる。また、研究の後継者を育成するためには、日本の大学の学部レベルでの北方文化研究教育の強化と充実が必要であると考えられる。

(注)

本稿では、頁数の関係で文献情報を網羅して引用掲載していない。基本的な文献を例として引用しているに過ぎないことをお断りしておきたい。最近の日本における北方研究に関する出版物については、北海道立北方民族博物館の「ノルリスト」を参照されたい。

## 引用・参考文献

### 和文

渥美一弥

2005 「『情報』としての『民族』—カナダ先住民サーニッチの『文化復興運動』における政治・経済的状况」北海道立北方民族博物館編『第19回北方民族文化シンポジウム報告—北太平洋沿岸の文化—政治経済と先住民社会』pp.51-56, 網走：北方文化振興協会。

2008 「「資源」としての民族誌的「情報」—カナダ・ブリティッシュ・コロンビア州先住民サーニッチの教育自治と「文化」復興」『立教アメリカン・スタディーズ』30: 37-76。

伊藤敦規

2007 「日本における北米先住民研究の歴史と現状——文化人類学分野」『立教アメリカン・スタディーズ』29: 109-143。

井上敏昭

2007 「「我々はカリブーの民である」 アラスカ・カナダ先住民のアイデンティティと開発運動」煎本孝、山田孝子編『北の民の人類学 強国に生きる民族性と帰属性』 pp. 95-122, 京都：京都大学学術出版会。

2008 「社会資源としてのサケ—ユーコン川上流域の先住民社会におけるサケの重要性とそれをとりまく諸問題」岸上伸啓編『海洋資源の流通と管理の人類学（みんぱく実践人類学シリーズ3）』 pp.41-68, 東京：明石書店。

2009 「アラスカの先住民と石油開発」岸上伸啓編『開発と先住民（みんぱく実践人類学シリーズ7）』 pp.305-330, 東京：明石書店。

2011 「越境する先住民社会—ユーコン川流域環境の改善に取り組む先住民政府間協議会」松本博之編『海洋環境保全の人類学（国立民族学博物館調査報97）』 pp.141-167, 大阪：国立民族学博物館。

- 2012 「アラスカ先住民の石油開発/環境汚染への対応」北海道立北方民族博物館編『第26回北方民族文化シンポジウム報告（環境変化と先住民の生業文化：陸域生態系における適応）』pp.17-24, 網走：(財)北方文化振興協会。
- 2015 「アラスカにおける石油開発と先住民権の歴史」北海道立北方民族博物館編『第29回北方民族文化シンポジウム報告（環境変化と先住民の生業文化－開発と適応－）』pp.11-16, 網走：(財)北方文化振興協会。

岩崎まさみ

- 2008 「サケの民カナダ北西海岸先住民：サケの保存・調理・分配」岸上伸啓編『海洋資源の流通と管理の人類学』（みんぱく実践人類学シリーズ3）pp.95-120, 東京：明石書店。

大村敬一

- 2005 「差異の反復：カナダ・イヌイトの実践知にみる記憶と身体」『民族学研究』70(2): 247-270。
- 2006a 「視覚芸術の構造を探る試み：北米大陸北西海岸インディアンの象徴的画像にみる造形素分析の可能性」松枝到編『象徴図像研究：動物と象徴』pp.245-279, 東京：言叢社。
- 2006b 「旅の物語のタペストリー：イヌイトの地図とナビゲーションにみる環境」北海道立北方民族博物館編『環北太平洋の民族と文化』pp.246-264, 札幌：北海道大学出版会。
- 2007 「生活世界の資源としての身体：カナダ・イヌイトの生業にみる身体資源の構築」菅原和孝編『身体資源の共有』（『資源人類学』第9巻）pp.59-88, 東京：弘文堂。
- 2009 「集団のオントロジー：「分かち合い」と生業のメカニズム」河合香吏編『集団：人類社会の進化』pp.101-122, 京都：京都大学学術出版会。
- 2011 「二重に生きる：カナダ・イヌイト社会の生業と生産の社会的布置」松井健・名和克郎・野林厚志編 pp.65-96, 京都：昭和堂。
- 2013a 『カナダ・イヌイトの民族誌－日常実践のダイナミクス』吹田：大阪大学出版会。
- 2013b 「生存の条件：オートポイエーシス・システムとしてのイヌイトの生業システム」北海道立北方民族博物館編『海洋環境における適応：環境変化と先住民の生業文化②』（第27回北方民族文化シンポジウム報告書）pp.31-36, 網走：(財)北方文化振興協会。

岡田淳子編

- 2000 『変容する Metlakatla Community』（平成10・11年度科学研究費補助金国際学

術研究 基盤(2)(B)「北西海岸インディアンの開発人類学的研究」研究成果報告書) 札幌：北海道東海大学。

岡田宏明

1996 「エスキモー」ヨーゼフ・クライナー編『日本民族学の現在－1980年代から90年代へ』pp.379-387, 東京：新曜社。

岡庭(松林)義行

2008 「アラスカ・ツィムシアンとアラスカ先住民法－「先住民」の開発を選ばなかった先住民たち」岸上伸啓編『北アメリカ先住民の社会経済開発』pp.193-219, 東京：明石書店。

岸上伸啓

2005 「日本人による北アメリカ先住民研究の動向について：1990年代以降を中心に」『人文論究』74: 13-42。

2006 「都市イヌイットのコミュニティー形成運動：人類学的実践の限界と可能性」『文化人類学』70(4): 505-527。

2007 『カナダ・イヌイットの食文化と社会変化』京都：世界思想社。

2008 「文化人類学的生業論－極北地域の先住民による狩猟漁撈採集活動を中心に」『国立民族学博物館研究報告』32(4): 529-578。

2009 「カナダにおける都市イヌイットの社会経済開発」岸上伸啓編『開発と先住民』pp. 331-353, 東京：明石書店

2012a 「アメリカ・アラスカにおける先住民生存捕鯨について」岸上伸啓編『捕鯨の文化人類学』pp.1-30, 東京：成山堂書店。

2012b 「米国アラスカ州バロー村のイヌピアットによるホッキョククジラ肉の分配と流通について」『国立民族学博物館研究報告』36(2): 147-179。

2014a 「カナダにおける北西海岸先住民ヌーチャヌルスの捕鯨と先住権」『北海道立北方民族博物館研究紀要』23: 23-34。

2014b 「カナダ・イヌイットのホッキョククジラ猟と先住権」『カナダ研究年報』33: 1-16。

岸上伸啓編

印刷中『環北太平洋地域の先住民文化』（国立民族学博物館調査報告）大阪：国立民族学博物館。

久保田亮

2005 「儀礼とダンスの断絶－宣教師の活動をめぐるアラスカ先住民ユピックの歴史認識」『東北人類学論壇』4: 1-20。

2006a 「今日の客は誰だ？－ダンス・パフォーマンスの組成に関する試論」北海道立北方民族博物館編『第20回北方民族文化シンポジウム報告（文化の十字路

ー北太平洋沿岸の文化)』 pp.71-76, 網走：北方文化振興協会。

- 2006b 「社交期としての冬-冬季娯楽行事にみるユッピック/チュピック社会生活の変化と持続」『東北人類学論壇』 5: 1-17。
- 2008 「現代ユッピックの「生き方」と金鉱開発プロジェクト」岸上伸啓編『北アメリカ先住民の社会経済開発(みんぱく実践人類学シリーズ4)』 pp.161-192, 東京：明石書店。
- 2009a 「チュピック村落社会の学校にみる先住民の自律」窪田幸子・野林厚志編『「先住民」とはだれか』 pp.179-200, 京都：世界思想社。
- 2009b 「法概念「サブシステム」の成立ー先住民権利保障へのドミナント文化の影響」『東北人類学論壇』 8: 22-53。
- 2011 「歌の帰郷ー民族誌的資料の「返還」と「活用」に向けた取り組みについて」『北海道立北方民族博物館研究紀要』 20: 11-24。
- 2012 「伝統ダンス進展期における先住民と文化の関係ーユッピック・ダンスがつなぐ社会関係について」高谷紀夫・沼崎一郎編『つながりの文化人類学』 pp. 297-333, 仙台：東北大学出版会。
- 2013 「アラスカ先住民による漁撈活動と気候変動の関係ーユーコン=クスクウイムデルタの事例検討」北海道立北方民族博物館編『第27回北方民族文化シンポジウム報告(環境変化と先住民の生業文化：海洋生態系における適応)』 pp.41-46, 網走：北方文化振興協会。

#### 国立民族学博物館編

- 2009 『自然のこえ 命のかたちーカナダ先住民の生みだす美』 京都：昭和堂。

#### 小林加奈子

- 2007 「カナダ先住民社会における伝統儀式の今日的な意味：仲裁および再生装置としてのポトラッチ」『立教アメリカン・スタディーズ』 29: 191-214。

#### 近藤祉秋

- 2014 「北方樹林の愛鳥家ー内陸アラスカにおける動物を殺す/生かすこと」『文化人類学』 79(1)： 48-60。

#### 齋藤玲子

- 2008 「アラスカ・ツィムシアン観光開発と文化復興」岸上伸啓編『北アメリカ先住民の社会経済開発』 pp.221-246, 東京：明石書店。

#### 齋藤玲子

- 印刷中 『カナダ先住民アートの変遷に関する研究』(国立民族学博物館調査報告)  
大阪：国立民族学博物館。

#### 齋藤玲子、大村敬一、岸上伸啓編

2010 『極北と森林の記憶－イヌイトと北西海岸インディアンの版画－』京都：昭和堂。

スチュアートヘンリ 本多俊和を参照。

高野孝子

2009 「大地とのつながりを求めて(1)－アラスカ州コディアック島での教育プログラムとアイデンティティの構築－」『北海道立北方民族博物館研究紀要』18: 29-58。

2010 「大地とのつながりを求めて(2) アラスカ州ロシアンミッション村、地域文化と伝統を織り込んだ教育課程」『北海道立北方民族博物館研究紀要』19: 15-42。

立川陽仁

2006 「北西海岸先住民の漁業漁師とオヒョウ」北海道立北方民族博物館編『第20回北方民族文化シンポジウム報告－北の十字路－北太平洋沿岸の文化－』pp.9-15, 網走：北方文化振興協会。

2007 「リクルーター制度と労働組合：カナダ、北西海岸先住民によるサケ漁業操業を支えた経済的環境について」『人文論叢』24: 179-192。

2008a 「現代カナダにおける北西海岸先住民の生業活動－クワクワカクウの漁業漁師の例から」『立教アメリカン・スタディーズ』30: 77-93。

2008b 「カナダ・バンクーバー島の先住民クワクワカクウとサケの養殖業」岸上伸啓編『北アメリカ先住民の社会経済問題』（みんぱく実践人類学シリーズ4）pp.273-300, 東京：明石書店。

2009 『カナダ先住民と近代産業の民族誌－北西海岸におけるサケ漁と先住民漁師の技術的適応』東京：お茶の水書房。

2010 「先住民養殖業協会の設立と活動」『人文論叢』27: 191-204。

2013 「チーフはだれか：現代カナダにおけるある判決と先住民社会をめぐって」『人文論叢』30: 73-85。

2014 「北西海岸先住民の現代における歓待について：フィールドワーカーの経験からの覚書」『人文論叢』31: 73-85。

手塚薫

2008 「アラスカ・コディアック島の先住民による商業サケ漁」岸上伸啓編『海洋資源の流通と管理の人類学』pp.69-93, 東京：明石書店。

北海道立北方民族博物館編

2006 『環北太平洋の環境と文化』網走：北海道立北方民族博物館。

本多俊和（スチュアートヘンリ）

- 2005 「民族文化としての狩猟採集活動ーイヌイトの事例から」本多俊和・大村敬一・葛野浩昭編『文化人類学研究ー先住民の世界』pp.81-96, 東京：放送大学教育振興会。
- 2006 「定住と生業ーネツリク・イヌイトの伝統的生業活動と食生活に見る継承と変化ー」北海道立北方民族博物館編『環北太平洋の環境と文化』pp.277-291, 網走：北海道立北方民族博物館。
- 2010 「北極地帯の環境：イヌイト社会と気候変動」内堀基光・本多俊和編『環境問題への文化人類学的アプローチ』pp. 217-228, 東京：放送大学教育振興会。
- 2014 「北アメリカ極北地帯の牧畜略史：グリーンランドとアラスカ、カナダの比較考察」北海道立北方民族博物館編『第28回北方民族文化シンポジウム報告（環境変化と先住民の生業文化：家畜飼育・牧畜における適応）』pp.1-7, 網走：(財)北方文化振興協会。

#### 宮岡伯人

- 1978 『エスキモーの言語と文化』東京：弘文堂。
- 1987 『エスキモー：極北の文化誌』東京：岩波書店。
- 1992 「環北太平洋の言語」宮岡伯人編『北の言語：類型と歴史』pp.3-65, 東京：三省堂。

#### 宮岡伯人編

- 1992 『北の言語：類型と歴史』東京：三省堂。

#### 山口未花子

- 2012a 「動物と話す人々」奥野克巳・山口未花子・近藤祉秋編『人と動物の人類学』pp. 3-28, 横浜：春風社。
- 2012b 「Part of the Animal – カナダ先住民カスカと動物との関係の諸相」『文化人類学』76(4): 398-416。
- 2014 『ヘラジカの贈り物』横浜：春風社。

#### 欧文

##### Abe, Juri and Atsunori Ito

- 2007 A Review of Literature and Trends in Native North American Studies in Japan. *Japanese Review of Cultural Anthropology* 8: 137-170.

##### Colombi, Benedict J. and James F. Brooks (eds.)

- 2012 *Keystone Nations: Indigenous Peoples and Salmon across the North Pacific*. Santa Fe: School for Advanced Research Press.

##### Fienup-Riordan, Ann and Alice Rearden



- 2005 *Wise Words of the Yup'ik People: We Talk to You because We Love You*. Lincoln, NE: University of Nebraska Press.
- Fienup-Riordan, Ann Marie Meade and Alice Rearden
- 2005 *Yup'ik Words of Wisdom: Yupiit Qanruyutait*. Lincoln, NE: University of Nebraska Press.
- Fienup-Riordan, Ann Jammie Fredda and Alice Rearden
- 2007 *Yuungnaqpiallerput/The Way We Genuinely Live: Masterworks of Yup'ik Science and Survival*. Seattle, WA: University of Washington Press.
- Gamo, Masao
- 1980 Alaskan Studies by Japanese Anthropologists. In Kotani, Y. and W. Workman (eds.) *Alaskan Native Culture and History* (Senri Ethnological Studies, No.4), pp. 17-21. Osaka: National Museum of Ethnology.
- Gombay, Nicole
- 2009 Sharing or Commoditising? : A Discussion of Some of the Socio-economic Implications of Nunavik's Hunter Support Program. *Polar Record* 45 (233): 119-132.
- Grossman, Zoltán and Alan Parker (eds.)
- 2012 *Asserting Native Resilience: Pacific Rim Indigenous Nations Face the Climate Crisis*. Corvallis: Oregon State University Press.
- Ikuta, Hiroko
- 2004 'We Dance Because We Are Inupiaq', Inupiaq Dance in Barrow: Performance and Identity. MA Thesis, Department of Anthropology, University of Alaska, Fairbanks.
- 2007 Inupiaq Pride: *Kivgiq* (Messenger Feast) on the Alaskan North Slope. *Études/Inuit/Studies* 31(1-2): 343-364.
- 2011 Embodied Knowledge, Relations with the Environment, and Political Negotiation: St. Lawrence Island Yupik and Inupiaq Dance in Alaska. *Arctic Anthropology* 48(1): 54-65.
- Jolles, Carol Z. and Elinor Miaghaq Oozeva
- 2002 *Faith, Food, and Family in a Yupik Whaling Community*. Seattle: University of Seattle Press.
- Kishigami, Nobuhiro
- 2004 Trends in Native North American Studies in Japan since the 1990s. *Japanese Review of Cultural Anthropology* 5: 91-121.

- 2008 Homeless Inuit in Montreal. *Études/Inuit/Studies* 32(1): 73-90.
- 2010 Climate Change, Oil and Gas Development, and Inupiat Whaling in Northwest Alaska. *Études/Inuit/Studies* 34(1): 91-107.
- 2013a Aboriginal Subsistence Whaling in Barrow, Alaska. In Kishigami, N., H. Hamaguchi, and J. M. Savelle (eds.) *Anthropological Studies of Whaling* (Senri Ethnological Studies 84), pp. 101-120. Osaka: National Museum of Ethnology.
- 2013b On Sharing of Bowhead Whale meat and Maktak in an Inupiat Community of Barrow, Alaska, USA. *Bulletin of Hokkaido Museum of Northern Peoples* 22: 1-19.
- 2013c The Inuit's Migration Patterns and Drastic Population Increase in Urban Centers of Canada. In Klaus-Dieter Ertler and Patrick Imbert (eds.) *Cultural Challenges of Migration in Canada* (Canadiana 12), pp.65-73. Frankfurt am Main: Peter Lang
- 2015 Low-income and Homeless Inuit in Montreal, Canada: Report of a 2012 Research. *Bulletin of the National Museum of Ethnology* 39(4): 575-624.
- Kishigami, Nobuhiro and Molly Lee
- 2008 Urban Inuit. *Études/Inuit/Studies* 32 (1): 9-11.
- Koperqualuk, Lisa Qiluqqi
- 2015 *Traditions Relating to Customary Law in Nunavik*. Westmount, QC: Avataq Cultural Institute.
- Krupnik, Igor and Dyanna Jolly (eds.)
- 2002 *The Earth Is Faster Now: Indigenous Observations of the Arctic Environmental Change*. Fairbanks: Arctic Research Consortium of the United States.
- Mashiko, Machiya
- 2006 A Comparative Study of Raven Myths in the North Pacific Region. *Bulletin of Kanazawa Gakuin University, Literature and Art* 4: 43-57.
- Miyaoka, Osahito, Osamu Sakiyama and Michael E. Krauss (eds.)
- 2007 *The Vanishing Languages of the Pacific Rim*. New York: Oxford University Press.
- Omura, Keiichi
- 2005 Science against Modern Science: The Socio-political Construction of Otherness in Inuit TEK (Traditional Ecological Knowledge). In Kishigami, N. and J. M. Savelle (eds.) *Indigenous Use and Management of Marine Resources* (Senri Ethnological Studies 67), pp.323-344. Osaka: National Museum of Ethnology.
- 2007 From Knowledge to Poetics: The Sophia of Anti-essentialistic Essentialism in Inuit traditional Environmental Knowledge. *Japanese Review of Cultural Anthropology*

7: 27-50.

- 2013 The Ontology of Sociality: Sharing and Subsistence Mechanism. In Kawai, K. (ed.) *Groups: Evolution of Human Species*. pp. 123-142, Kyoto and Melbourne: Kyoto University Press and Trans Pacific Press.

Sakakibara, Chie

- 2008 'Our Home is Drowning': Inupiat Storytelling and Climate Change in Point Hope, Alaska. *Geographical Review* 98(4): 456-475.
- 2009 'No Whale, No Music': Inupiat Drumming and Global Warming. *Polar Record* 45 (235): 289-303.
- 2010 *Kiavallakkikput Agviq* (Into the Whaling Cycle): Cetaceousness and Climate Change among the Inupiat of Arctic Alaska. *Annals of the Association of American Geographers* 100(4): 1003-1012.

Stewart, Henry

- 2005 The Fish Tale That Is Never Told: A Reconsideration of the Importance of Fishing in Inuit Societies. In Kishigami, N. and J. M. Savelle (eds.) *Indigenous Use and Management of Marine Resources* (Senri Ethnological Studies 67), pp.345-361. Osaka: National Museum of Ethnology.

Terpstra, Tekke

- 2015 *Inuit outside the Arctic: Migration, Identity and Perceptions* (Circumpolar Studies 10). Groningen, Netherlands: the Arctic Center of the University of Groningen.

Wenzel, George W.

- 2013 Inuit and Modern Hunter-gatherer Subsistence. *Études/Inuit/Studies* 37(2): 181-200.